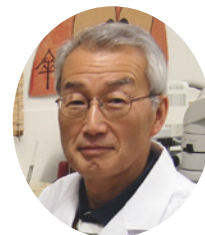


木材利用の試験研究機関に勤務して①

～普及課で世間の広さを学ぶ・前編～

旭川工業高等専門学校 名誉教授 富樫 巖



■はじめに

1998年4月から2004年3月末までの6年間、当時の企画指導部普及課に課長職として勤務しました。カビやキノコと付き合う仕事から人と付き合う仕事への転向であり、異動当初には戸惑い、不安、不満などの後ろ向き・横向きの気持ちが渦巻いていました。一方、その7年後の2005年4月から16年間の旭川高専勤務を経た身としては、世間の広さを学んだ貴重な体験と感じています。普及課勤務なしでの高専勤務は定年、そして再雇用まで耐えられなかったであろうと察します（同僚・他キャンパスの高専教職員に加え、学生・保護者、高専同窓会員、企業の人事採用担当者、高体連・高野連関係者など多種多様な方々との付き合いと様々なリクエストへの対応が求められる世界でした）。

普及課は木材利用に関わる技術的課題の対応（企業などと場内研究部をつなぐ役割）に加えて、道の一般行政・普及行政、直接・間接につながる業界（企業、団体など）、道以外の行政、関連する大学・各種研究機関、木材や木質製品のエンドユーザーの道民・一般市民、そしてマスコミなどに対応する部署であり、（一社）北海道林産技術普及協会（以下、普及協会）との連携も不可欠でした。

■普及課の担当業務と小生が感じたその守備範囲

今、インターネットで「林産試験場のすがた」と打ち込んで検索をかけると、（地独）道総研・林産試験場の組織紹介ページが出ます。そして「企業支援部の普及連携グループ」をみると、「普及連携」・「広報」・「技術支援」の3つのグループ名と各グループの担当業務が記載されています（イラスト1）。1998～2004年度の普及課の担当業務とほぼ一致します。

各担当業務に紐づけされている具体的なイベント・催し企画（例えば、「木になるフェスティバル」など）については割愛しますが、普及課業務は林産試験場を囲む全方向に配慮するミッションを背負っていると小生は感じました。それを野球の内野守備を用いて解説しますと（イラスト2）、普及課を三塁手とすれ

ば三塁手の守備範囲と三遊間に飛んだボールのみならず、遊撃手・二塁手・一塁手（以上を場内の研究部と考えます）が取れないと判断した二遊間や一・二塁間に飛んだ打者ランナーのヒット性の打球も取りに行くノルマがあるのです。ただし、その打球を補給できるか？できたか？の結果については不問です。

具体的な一例を挙げると、イメージの良い林産試験場や木材利用を世間に売り込む種々の任務が普及課に与えられており、場内に落ちているゴミと遭遇したら積極的に処理する行動が求められると察しました。常日頃から、林産試験場を訪れる外部の方々の目を意識する必要があります（コロナ禍により、ゴミ拾い時にはそれなりの装備・配慮が欠かせませんが…）。

普及連携グループ	普及連携 (内線414) (直通 0166-75-237)	普及に関する連絡調整、成果の普及推進、各種行事の開催・参加・協力、情報館の管理運営、展示物に関すること
	広報 (内線416, 412) (直通 0166-75-237)	知的財産権、広報、ホームページ作成・更新、刊行物発行、視察・見学(内線416)、技術相談(内線412)
主幹 (内線420)	技術支援 (内線415)	技術支援(依頼試験、設備使用、講師派遣等)の技術支援

イラスト1. 林産試験場HPの組織紹介一覧（抜粋）

注：（地独）道総研森林研究本部・林産試験場 <https://www.hro.or.jp/list/forest/research/fpri/organization/index.html> (2024.11.25) を引用、一部抜粋

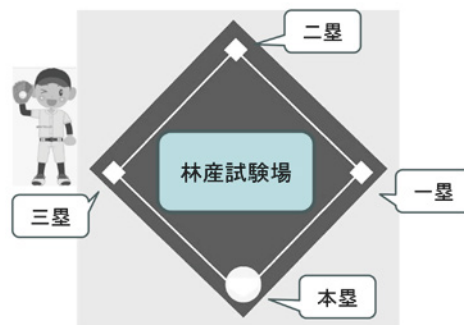


イラスト2. 野球場の内野グラウンド

注：イラストボックス <https://www.illust-box.jp/sozai/> を引用、一部改変

■普及課の2つの係：技術係と普及係

1998～2004年度前後、普及課には技術係（係長以下3名の係員）と普及係（係長以下4名の係員）の2つがあり、計8名でイラスト1の担当業務に励んでいました（あいまいな記憶になってはいますが、HPの作成・更新は含まれていなかった気がします）。技術係は「刊行物発行」、主には毎月の広報誌・林産試だよりと隔月の学術誌・林産試験場の編さんと印刷・製本の外注および仕上がった冊子の郵送、そして「視察・見学者」の受付、場内部署との調整、案内役がメイン業務で、各担当業務に紐付けされている実務項目がシンプルでほぼルーチ的なものが占めていました。

一方、普及係は「普及に関する連絡調整」、「成果の普及推進」、「各種行事の開催・参加・協力」がメイン業務で、それらに紐付けされる実務項目の数が多く、年度途中で飛び入りする想定外の行事もあり、結果として毎日の仕事がオーバーフロー状態でした。普及課長の小生は5人目の普及係員としても働きました。

■林産試だよりのデジタル化と発行時期の前倒し

道財政のひっ迫により、年ごとに林産試験場の年間予算が減少し続けていました。問題視されたのが、上述の「林産試だより」と普及協会が毎月、会員に送付する会誌「ウッドイエージ」の類似性です。林産試験場の歴史を紐解けば、合理的な出発点があって存在していた2誌ですが、時代の流れと予算面から両誌の差別化が場内で求められたのです。

結果として、2004年度からWeb版のみの林産試だよりになりました。運よく技術係長のYさんがデジタル技術のノウハウに詳しく、小生は全面的に彼の企画に頼りました。合わせて、冊子の廃止に向けた場内の合意形成にも取り組んでもらいました。Web化と同時に読者の方々へメールマガジンで林産試だよりの発行をお知らせすることで、印刷・製本・発送の経費を抑え、ウッドイエージとの差別化も図るに至りました。

Web化の半年後、林産試だよりは月末発行から月初めへの発行にシフトしました。技術係長2名（Yさん、そしてKさん）のバトンリレーでしたが、技術係の努力が実を結んだもう一つの成果です。震源地はどこなのかは分かりませんが、月末発行はひと月遅れであるとの厳しいクレームが普及課に来ていました。普及課長の打開案としては、隠し玉の1冊分を編集し、どこかのタイミングで月初めに発行することでした。しか

し、印刷物だと1年間に13回分の予算確保が必要となる課題があります。Web化は林産試だよりの発行時期の前倒しにも貢献しました。

蛇足とは察しますが、普及協会のウッドイエージは林産試だよりのコンテンツに、独自の巻頭記事2編程度を追加した印刷物として月末頃に発行され続けています。そして2年ほど前から、普及協会ではウッドイエージの各記事をHPにアップしています（PDFファイル使用、最新号のみ発行後1か月間は記事タイトルと著者のみを掲載：イラスト3）。



イラスト3. 普及協会HP（抜粋）

注：普及協会 <https://rinsan-fukuy.jp/woodyage> (2024.11.25) を引用、一部抜粋

■刊行物DBの構築

デジタル化が進み、存在が当たり前になったのが刊行物DB（データベース）です。DBには刊行物の電子データと同データの検索システムが不可欠です。企業の雇用促進を支援する国家予算が振る舞われた際に企画課長のIさんの発案で同DBの構築が決定し、情報係長のSさんの尽力によるプロポーザル入札（当時としては新規手法）で担当企業の選定に至りました。

予算の関係もあって全作業を委託するには難があり、刊行物の電子データ化はY係長を中心に技術係（延べ2名のアルバイト人員含む）も取り組みました。当時はOCR技術が未発達であり、スキャナで読み取った電子データが検索可能なデータに変換されることは稀で、キーボードでテキストデータを打ち込み直すこともありました。そうした電子データを担当企業が構築した検索システムに載せてDBの完成です。

今回は、かつて「ウッドサマーフェスティバル」と呼んでいた普及係担当の夏のイベントが、「木になるフェスティバル」に名称変更&スケール変更した発端などを紹介します。（つづく）